



中学校陸上競技部における発達障害のある生徒への指導実践に関する事例研究ーインクルーシブな活動環境づくりと効果的な支援方法の検討ー

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立大学法人兵庫教育大学 公開日: 2025-11-30 キーワード (Ja): 運動部活動, 発達障害, 支援体制, 指導上の工夫 キーワード (En): junior high school sports club, developmental disorder, support system, teaching techniques 作成者: 本城, 幸治, Honjyo, Koji, 中島, 武史, Nakashima, Takeshi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15117/0002000752

中学校陸上競技部における発達障害のある生徒への指導実践に関する事例研究 －インクルーシブな活動環境づくりと効果的な支援方法の検討－

A Case Study on Coaching a Student with Developmental Disorder in a Junior High School Track and Field Club : Creating an Inclusive Environment and Considering Effective Support

本 城 幸 治* 中 島 武 史**
HONJYO Koji NAKASHIMA Takeshi

本研究は、中学校陸上競技部における発達障害のある生徒への指導実践事例を通して、運動部活動における課題、効果的な指導支援の方法、および指導による生徒の変容過程を明らかにすることを目的とした。A 市立 B 中学校の陸上部活動顧問 1 名、発達障害のある生徒 1 名、および保護者 1 名を対象に半構造化インタビューを実施し、SCAT (Steps for Coding and Theorization) を用いて質的分析を行った。分析の結果、対象生徒は対人関係において自己認識や社会認知の困難を抱えており、それが他の部員との関係悪化や精神的負担につながっていたことが明らかとなった。また、基本的な自己管理能力に課題があったものの、視覚的支援と人的支援を組み合わせた包括的支援体制によって、2 年生になると自立的な行動が増加するなどの変化が見られた。本研究は、発達障害のある生徒に対する視覚的支援や個別ノートの活用、スモールステップ指導の有効性を示すとともに、インクルーシブな環境づくりと指導者の支援の在り方を明らかにした。

キーワード：運動部活動, 発達障害, 支援体制, 指導上の工夫

Key words : junior high school sports club, developmental disorder, support system, teaching techniques

第 1 章 問題と目的

1.1 運動部活動の意義と現状

文部科学省 (2013) によれば、運動部活動は、学校教育の一環として重要な役割を果たしてきた。その教育的意義は大きく 3 つの側面から捉えることができる。第一に、スポーツの楽しさや喜びを体験し、生涯にわたる豊かなスポーツライフの基盤を形成する機会を提供している。第二に、体力の向上や健康の増進といった身体的発達に寄与している。第三に、保健体育科等の教育課程内で身につけた技能を発展・充実させる実践の場として機能している。

さらに、運動部活動には人間形成的側面も存在する。チームワークやリーダーシップの育成といった社会性の涵養、目標達成に向けた努力を通じた精神的成長など、全人的な発達を促す機会となっている。これらの活動を通じて培われる資質・能力は、学校教育活動全体にも波及的な効果をもたらしている (文部科学省, 2013)。

その一方で、運動部活動は現在、教諭の長時間労働、専門的指導者の不足、休養日の設定や活動時間の適正化など、持続可能性の観点から様々な課題に直面している (文部科学省, 2018)。このような運営体制の課題に加え、個々の生徒の特性に応じた支援の在り方も重要な課題となっている。特に、発達障害のある生徒をはじめとする特別な配慮を必要とする生徒たちに対して、適切な支援

と指導を提供できる体制の構築が不可欠となっている。

1.2 発達障害のある生徒の運動部活動における課題

発達障害のある生徒は、独特のこだわり、対人コミュニケーションの困難さ、集中力の拡散と注意の散漫、情報理解の困難さ、運動技能遂行の遅さ・不正確さといった特性を有することが多い (吉岡ら, 2023)。さらに山下ら (2010) は、感覚過敏及び感覚鈍麻、空間認知や模倣の困難さ、調整能力、情報処理能力の乏しさ、予測動作や運動企画の困難さといった発達障害特有の障害特性が種目ごとに異なる形で存在し、スポーツ参加の困難さにつながっていることを報告している。

これらの特性が理解されず、適切な指導が提供されなければ、発達障害のある生徒の運動部活動への参加機会は減少し、その結果、運動部活動に消極的になったり、参加しても充実感を得られなかったりすることで、学校生活全般にも影響を与える状況になることが考えられる。

1.3 研究目的

そこで本研究は、中学校陸上競技部における発達障害のある生徒への指導実践事例を通して、(1) 発達障害のある生徒の運動部活動における課題、(2) 効果的な指導支援の方法、(3) 指導による生徒の変容過程を明らかに

* 明石市立望海中学校

令和 7 年 7 月 10 日受理

** 兵庫教育大学大学院特別支援教育専攻障害科学コース 准教授

することを目的とする。特に、定型発達の生徒と共に活動する中での部活動運営上の工夫が生徒の成長にもたらす効果について、質的研究の手法を用いて検討する。

第2章 研究方法

2.1 予備調査

本研究では、本調査の実施に先立ち、予備調査を行った。予備調査として、2023年10月30日から2024年4月30日にかけて、A市立B中学校陸上競技部の活動に週1回程度参加し、参与観察を行った(全10回)。研究対象は陸上競技部に所属する発達障害のある生徒1名(以下、T)と顧問教諭(以下、Y)、及び他の部員であった。なお、参与観察にあたってはB中学校長の許可を得て実施した。

2.1.1 予備調査の目的と方法

予備調査の目的は、発達障害のある生徒の運動部活動における具体的な課題を把握すること、後のインタビュー調査で聞くべき内容を明確にすること、対象者の様子を事前に理解することであった。参与観察では、部活動における生徒間の相互作用や指導者との関わり、発達障害のある生徒の活動への参加状況、指導者による支援の具体的な方法に着目して記録を行った。観察記録は、フィールドノートに時系列で記録し、観察終了後に詳細な記述を行った。

2.1.2 予備調査の結果と本調査への示唆

参与観察の記録を表1に示す。予備調査を通じて、発達障害のある生徒の特徴的な課題として、対人関係における困難さ、活動の理解や技術習得に関する課題、自己管理面での課題が明らかとなった。これらを基に、インタビュー調査における質問項目を作成した。具体的には、指導上の工夫や配慮、生徒の変容過程、支援の効果などを中心的な質問項目として設定した。また、予備調査での参与観察を通じて、インタビュー対象者との関係性を構築できたことで、より詳細な聞き取りが可能となる環境を整えることができた。

表1 フィールド調査における観察の概要

観察日	観察内容の概要
① 2023. 10.30	・Yは、倉庫の壁・ネットに目標や予定、達成シートを掲示し、生徒への視覚的支援を行っている。また、長距離走のトレーニングでは5メートル間隔に異なる色や大きさのコーンを設置することで、生徒が走行距離を視覚的に把握できるよう工夫している。
② 2023. 12.18	・Yは、ハードル走の練習で、4種類の間隔を用意し、生徒が自身の能力に応じて選択できる環境を整えている。コントロールテストを実施し、生徒が現状を把握した上で短期目標を立て、評価できるよう支援している。
③ 2024. 1.19	・Yは、年間を通し部内で駅伝大会やミニ運動会、卒部式、合同練習などのイベントを企画・実施し、部員が楽しみながら活動できる機会を作っている。その際、Yは、Tが包容力のある生徒のチームに配置されるよう、チーム編成に配慮している。

④	2024. 2.1	・部対抗での活動後には、生徒同士でMVPを推薦し合い、上位4名を表彰する取り組みを行った。Tは4人の生徒から推薦を受け、昨年は受けることができなかった推薦を得られたことを非常に喜び、自己肯定感の高まりが見られた。
⑤	2024. 2.13	・生徒は試合やイベント後に個人ノートを作成して提出し、Yからアドバイスや助言を受ける機会が設けられている。
⑥	2024. 2.26	・Yは活動終わりのミーティングで、部員同士がペアを組んで互いの良いところを褒め合う活動を取り入れ技術指導に加えてチームワークを高める指導を行っている。Tは他の部員から「応援や準備を頑張っている」と評価され、さらなる自己肯定感の向上が見られた。
⑦	2024. 3.11	・Yは練習中、Tに対して「今の良かったね」「もっとここを直そう」などこまめに声かけをし、積極的に褒める指導を行っている。特に長距離走など苦しい練習の際には、部員全体で声を掛け合い、良好な雰囲気づくりが行われている。
⑧	2024. 3.18	・Tから後輩との関係について相談を受けた際には、Yは丁寧に話を聞き、後輩への事実確認と保護者への連絡を行った。1年次には保護者からの相談が多かったが、現在は保護者も安心して様子である。Tも、Yに相談したことで納得した様子が見られた。
⑨	2024. 4.15	・Yは最後の大会を1ヶ月後に控えながらも、新入部員をほっておくことなく、2・3年生をペアにして丁寧な指導を行うなど、勝利至上主義に偏らない指導を実践している。その結果、小学校時に特別支援学級に在籍していた生徒を含む32名の新入部員が入部している。
⑩	2024. 4.30	・Yは、日々の練習でTと1年生との間でトラブルが生じないように、全体の様子を観察しながら適切な声かけを行っている。

2.2 本調査

2.2.1 調査対象

A市立B中学校の陸上競技部の顧問1名(Y)、部に在籍している発達障害のある生徒1名(T)、発達障害のある生徒の保護者1名(Z)、計3名を調査協力対象者とした。詳細は表2に示す。

表2 調査協力対象者の概要

Y (顧問)		T (生徒)		Z (保護者)	
年齢	40代	年齢	15歳	年齢	40代
性別	女	性別	男	性別	女
職種	養護教諭	学年	中3年生	職種	教諭 (特別支援学級)
教職歴	20年 (採用されてから)	クラス	特別支援学級	特別支援の免許	取得予定
部活動指導歴	20年 (採用されてから)	交流学級	あり	/	
特別支援の免許	なし	障害名	自閉症スペクトラム		
		療育手帳	なし		

2.2.2 調査方法

予備調査の結果を基に、2024年6月から7月にかけて半構造化インタビューを実施した。インタビューは1人あたり60分程度とし、調査協力者の同意を得たうえで録音を行った。

2.2.3 インタビュー調査の内容

予備調査での結果を踏まえ、表3に示す質問項目を設定した。Y（顧問）に対しては支援方法や指導上の工夫について、T（生徒）に対しては部活動での経験や意識の変容について、Z（保護者）に対しては家庭での様子や部活動参加による変化について、それぞれの立場から詳細な聞き取りを行った。

2.2.4 分析方法

本研究では、インタビューにより得られたデータを、大谷（2007）が提案するSCAT（Steps for Coding and Theorization）を用いて分析した。まず、インタビューの音声データから逐語録を作成し、調査対象者ごとにインタビュー項目別に整理した。次に、作成した逐語録を意味のまとまりごとに区切り、分析用の表のテキスト欄に記入した。その後、SCATの4ステップのコーディング手続きに従って分析を進めた。具体的には、テキストから着目すべき語句を抽出し、それらの言い換えを行い、テキスト外の概念を付与した上で、テーマ・構成概念を生成した。最後に、生成された概念を用いてストーリーラインを作成した。実際の分析過程の例を表3に示す。分析過程では、妥当性を担保するために、特別支援教育を専門とする教諭1名と特別支援教育を専攻する大学院生複数名と共に確認し、作業を行った。

2.2.5 倫理的配慮

調査対象者には、研究の趣旨、プライバシーへの配慮、調査結果の活用方法について記した調査協力依頼書への署名をもって同意を得たものとした。また、匿名性の確保と共に、研究目的以外では個人情報を使用しないことを口頭と文章で説明し、同意後であっても拒否と撤回が可能であることを説明したうえでインタビューを行った。

第3章 結果と考察

分析結果は「Tの運動部活動での課題」、「Yの指導における基本姿勢」、「Yの効果的な指導方法」、「Tの変容過程」の4項目にわけて、ストーリーラインとして示す。【】は抽出したテーマ・構成概念である。なお、インタビューにおいて、Tは考えや思いのすべてを十分に語る事ができないこともあった。そのため、Tのストーリーラインにおいては、参与観察時のTの様子も含めながら著者が読み取り補足理解した内容を含めている。また、Tの意図が伝わりやすいよう可能な限り会話調のまま示すこととした。

3.1 Tの運動部活動の課題

Tの運動部活動の課題は「対人関係の課題」、「自己管理能力の課題」、「技術理解の課題」に分類された。

表3 インタビュー調査の内容

(1) Y（顧問）への質問項目	
①部活動指導全般について	<ul style="list-style-type: none"> ・部活動の顧問を引き受けた理由 ・陸上競技を通して生徒に伝えたいこと
②Tの特性と成長について	<ul style="list-style-type: none"> ・Tの発達特性について ・3年間の部活動を通じた成長過程
③指導上の工夫について	<ul style="list-style-type: none"> a) 基本的な指導方針 <ul style="list-style-type: none"> ・掲示物による視覚的支援 ・部活動通信・個人ノートの活用 ・イベントを通じた指導（ミニ運動会、クリスマス会等） b) 技術指導 <ul style="list-style-type: none"> ・スモールステップによる指導 ・コントロールテストの実施 ・シンクロコーチングの活用 c) チーム運営 <ul style="list-style-type: none"> ・勝利至上主義によらない指導方針 ・保護者との連携体制 ・社会性の指導（挨拶・返事等） ・指導準備の重要性
(2) T（生徒）への質問項目	
①部活動全般について	<ul style="list-style-type: none"> ・入部動機 ・活動を通じての楽しかった経験 ・活動における困難点
②指導に対する受け止め方	<ul style="list-style-type: none"> a) 基本的な指導方針について <ul style="list-style-type: none"> ・視覚的支援の効果 ・部活動通信の役割 b) 技術指導について <ul style="list-style-type: none"> ・スモールステップによる指導 ・コントロールテストの効果 ・シンクロコーチングの有効性 c) チーム活動について <ul style="list-style-type: none"> ・イベントを通じた活動の効果 ・社会性の指導に対する認識 ・試合前・練習前の指導体制
(3) Z（保護者）への質問項目	
①部活動参加に関する認識	<ul style="list-style-type: none"> ・入部決定時の心情 ・入部に際しての懸念 ・活動における困難点
②子どもの変容について	<ul style="list-style-type: none"> ・後輩とのトラブル ・家庭での様子 ・成長の実感
③指導に対する評価	<ul style="list-style-type: none"> a) 指導方針について <ul style="list-style-type: none"> ・視覚的支援の効果 ・部活動通信・個人ノートの役割 b) 技術指導について <ul style="list-style-type: none"> ・スモールステップによる指導の効果 c) チーム運営について <ul style="list-style-type: none"> ・社会性の指導に対する捉え方 ・試合前・練習前の指導体制への捉え方

3.1.1 対人関係の課題

Yの語り

Yは、Tが突発的に行動したり、不適切な態度で発言

表4 SCATによる分析過程の例

番号	発話者	テキスト	〈1〉 テキスト中の注 目すべき語句	〈2〉 テキスト中の語 句の言い換え	〈3〉 左を説明するよ うなテキスト外 の概念	〈4〉 テーマ・ 構成概念	〈5〉 疑問・課題
30	聞き手	特別支援学級の生徒と共に部活動を行う中で、指導者として気づかれたことはありますか？					
31	Y	もちろん配慮も必要やし、手もかかるし、トラブルも多いし、時間は取られるんやけど、けど、3年間見たら、こんだけ成長したんやなくてすごくわかる。3年間になってる。	配慮も必要やし手もかかる トラブルも多い 時間は取られる こんだけ成長した	→細やかな注意や気配りが求められる →問題や困難が頻繁に発生する →多くの時間を費やす →顕著な進歩を遂げた	継続的支援 長期的な視点	【継続的なサポート】 【長期的な展望】	Yは、途中での困難をどのように乗り越えたのか？ 具体的にどのような注意や気配りが必要か？
32	聞き手	特別支援学級の生徒の成長度合いはすごいなっていうことですか？					
33	Y	関われば関わるほどこんな風にして成長できるんやとか、こんなことができんねやとか、今まであーやらしてなかっただけなんかなとか、別にみんなともこんな風に関われるよなみたいな。	関われば関わるほど あーやらしてなかっただけ みんなともこんな風に関われる	→関係が深まるにつれて →適切な機会や支援が与えられていなかった →他の部員とも同様に关われる。	指導者の関わり方 生徒の潜在的能力	【潜在的な能力の顕在化】	なぜ今までできていなかったのか？ この気づきをどう他の場面に応用できるか？
ストーリーライン		発達障害がある生徒の部活動参加は、問題や困難が頻繁に発生し、指導には細やかな注意や気配りが求められる。しかし、【継続的なサポート】と【長期的な展望】を持つことで、3年間の成長の過程を振り返ると、生徒たちの目覚ましい発達が明確に認識できる。指導者が長期的な展望を持ち、【継続的なサポート】を行うことによって、発達障害がある生徒の【潜在的な能力が顕在化】される。					
さらに追級すべき点・課題		<ul style="list-style-type: none"> ・Yは困難をどのように乗り越えたのか？ ・具体的に、どのような注意や気配りが必要か？ ・なぜ今までできていなかったのか？ ・どのような点で、発達が確認できたのか？ 					

することで部員から【集団受容】されないことを【自己認識】し、理解することが【社会適応】する上で必要だと考えている。

Tの語り

「2年生の8月頃までは、学年間の関係は良好でした。しかし、9月から、Tと後輩たちとの関係性が悪化し始めました。特に、後輩たちから私が【ターゲット】にされ、『偉そうだ』とか『あれをしろ、これをしろ』といった批判や要求等の【圧力を受ける】ようになりました。この状況は9月から今年の4月頃まで継続し、私にとって大きな【精神的負担】となりました。なぜ自分だけがそのような扱いを受けるのか、理解できず苦悩する日々が続きました。」

Zの語り

「チームで活動するので周りの足を引っ張ってしまったり、空気が読めない【社会認知の困難さ】や不快にさせる【不適切なコミュニケーション】をしてしまったり。それに、環境に慣れてくると横柄な態度を取ってしまう傾向があるので、その点が気になっています。特に対人関係の心配が大きいんです。」と母親が子どもの【社会適応への不安】を語っている。

これらの語りから、Tには、自己認識や不適切な態度で発言するなどコミュニケーションの面で課題があることが伺える。

3.1.2 自己管理能力の課題

Yの語り

Tは、1年生の時には何をやるにも誰かの手助けが必要だったが、2年生になると自分でできることが増えていった。最初は、練習時間や集合時間、何をすべきかといった基本的なことまで全て、紙に書いて渡す【視覚的支援】や、先輩に付き添ってもらい、保護者との連絡を欠かさない【人的支援】など、周りの【包括的支援体制】が欠かせない状態だった。

この語りから、Tには、1年時には基本的な自己管理能力に課題があり、それを視覚的支援と人的支援を組み合わせた包括的支援体制によって補っていたことが分かる。

3.1.3 技術理解の課題

Yの語り

Yは、Tへの指導で言語的な説明だけでは理解が難しいことに気づき【指導方法の工夫】を行った。Tは指導の際に「はい」と返答するものの、実際の理解に不安が残る状況があった。そこでYは、Tの理解を促進するために、ノートへのコメント記入や動画教材の提示、プリントの配布など、【視覚情報を活用した学習支援】を積極的に行った。特に走り幅跳びの踏切技術の指導では、これらの【視覚的な指導効果の実証】ができた。

この語りから、Tには、言語的な説明だけでは十分な理解に至らず、ノートやプリント、動画教材といった視覚情報を併用した指導がより効果的であることが伺える。

3.2 Yの指導における基本姿勢

Yの指導における基本姿勢は「長期的支援の重要性」、「支え合いによる相互成長」、「インクルーシブなチーム作り」に分類された。

3.2.1 長期的支援の重要性

Yの語り

発達障害がある生徒の部活動参加は、問題や困難が頻繁に発生し、指導には細やかな注意や気配りが求められる。しかし、【継続的なサポート】と【長期的な展望】を持つことで、3年間の成長の過程を振り返ると、生徒たちの目覚ましい発達が明確に認識できる。

指導者が長期的な展望を持ち、継続的なサポートを行うことによって、発達障害がある生徒の【潜在的能力が顕在化】される。

この語りから、部活動において発達障害がある生徒は、様々な困難に直面することが多く、教諭が長期的な展望を持ち、継続的なサポートを行うことで、生徒たちは大きな成長を遂げることができるとYは捉えていることが分かる。

3.2.2 支え合いによる相互成長

Yの語り

Tも、他の部員も【相互成長】が見られ、3年間で目覚ましい成長を遂げた。しかし、おそらくその成長の度合いから見ると、Tと関わる他の部員の方がより大きな成長を遂げたのではないかと考えている。

Tとの関わりを通じて、他の部員は自分の新たな一面を【自己発見】できる。例えば、自然にTのそばに寄り添い、気遣いの言葉をかけたり、困っているときにすぐに助けに行ったりする【社会性の発達】が身につく。

確かに、Tとの交流には課題や困難な側面も存在する。しかし、他の部員が自発的にこれらの行動を取れるようになることは、非常に重要な成長だと考えている。気配りができるようになり、他者への配慮ができるようになる。これらの【共生による人格形成】は、大きな意義がある。

この語りから、Yは、Tだけでなく他の部員も、Tと部活動を共にすることにより、相互成長できると捉えていることが分かる。具体的には、他の部員はTに寄り添ったり、気遣いの言葉をかけたり、困っているときにすぐに助けに行ったりする気配りや配慮などの社会性が身に付くと捉えている。

3.2.3 インクルーシブなチーム作り

Yの語り

Yは【包括的なチーム作り】を考えて、実力のある生徒たちが常に一緒にペアを組むのは、好ましくないと考えている。確かに、実力者同士でペアを組めば上達の度合いは高くなり、練習メニューもスムーズにこなせる。しかし、いつも上手くできない生徒たちの気持ちも考慮する必要がある。そういった子どもたちが取り残されてしまう可能性があることを、リーダーたちには常に意識させている。また、Yは、部員に対してTへの思いやりの心を持つよう【相互理解の促進】を指導し、Tに

は自らコミュニケーションを図るように指導している。この互いの理解と助け合いの指導により、【社会的スキルの獲得】を目指している。

この語りから、Yが包括的なチーム作りを重視した指導を行っていることが分かる。具体的には、実力のある生徒同士のペア固定化を避けることで多様な生徒の相互学習を促進し、また部員にTへの思いやりの心を持つよう指導するとともに、Tには主体的なコミュニケーションを促すことで、互いの理解と助け合いの関係を築こうとしている。

3.3 Yの効果的な指導方法

Yの効果的な指導方法は「視覚情報を活用した学習支援の効果」、「個人ノートを通じたコミュニケーションの意義」、「部活動通信の多面的な役割」、「イベントの教育的意義」、「スモールステップによる活動支援の有効性」、「コントロールテストの効果」、「シンクロコーチングの実践と効果」、「規律ある環境づくりの意義」、「事前の段取りの重要性」、「保護者との連携構築」、「SSTによる社会適応能力の獲得」に分類された。

3.3.1 視覚情報を活用した学習支援の効果

Yの語り

Yは、Tの指導において、【視覚情報を活用した学習支援】を多く取り入れた。例えば、走り幅跳びの技術指導をする際は、動画やプリントを見せたり、重要な情報を通信として文章化したりした。また、部員が見える場所に記録や目標を掲示することで【可視化による動機づけ】を行い、1週間分のスケジュールを掲示して自主運営できる環境を構築した。さらに、トレーニングの【環境デザイン】にも視覚支援を効果的に取り入れ、特に、部員の距離認識を支援するために異なる色のコーンを用いて走行距離を明示した。

Tの語り

【視覚支援の効果】について、Tは「目標が貼ってない時は、チーム全体がちょっと悪くなるんじゃないかな。でも、【目標を視覚化】すると【モチベーションの向上】を感じ、頑張ろうという気持ちになって、最後はベスト出なかったらまずいって思うようになります」と【目標の視覚化の重要性】を語っている。

Zの語り

また、Zはこれまでの経験から、「Tの【認知特性】として、【視覚的な情報処理】が得意だということは、【複数の教育者から評価】されてきたことで、それは確かな特徴だ」と述べている。

これらの語りから、Yは視覚情報を活用した支援を、技術指導（動画・プリント）、動機づけ（記録・目標の掲示）、自主運営（スケジュール掲示）、環境設定（色分けコーン）など、多面的に展開していたことが分かる。このような視覚的支援は、Tの視覚的な情報処理が得意という認知特性に適合し、技術向上や動機づけを促進するものであったと言える。

3.3.2 個人ノートを通じたコミュニケーションの意義

Yの語り

個人ノートの意図について、Tの【記述の質的变化】がみられる。以前は単に「うまくいかなかった」といった否定的な感想のみだったが、現在は陸上競技に関する専門的な理解を反映したコメントが増えている。この変化は、【定期的な振り返り】と記述の機会を設けたことによるものと考えられる。その結果、Tの思考が広がり、より詳細な【自己分析】ができるようになったと言える。

Tの語り

Tは【個人ノートでの対話】について、「コントロールテストでダメだった時は『あー、頑張らないと』と書いて、ベストを達成した時はYが『次の目標は2800m』と【具体目標の提示】をしてくれました。私はそれに対して『こうこう頑張ります』と具体的な決意を書き、辛い練習を重ねて2800mを目標通り達成できた時、Yは『グッド』と【肯定的評価】をしてくれて嬉しかった。」と語っている。

Zの語り

「目標を持つことができ良かったと思います。もし目標がなかったら、きっと【目的意識】無しに、ただ漫然と記録会に参加するような、【受動的活動】になっていたと思います。」とZは、個人ノートによる【目標設定の意義】について語っている。

これらの語りから、個人ノートは単なる記録ではなく、Tの思考を深め、目標達成への具体的な道筋を示すツールとして機能していることが分かる。YはTの現状を把握し、達成可能な目標を段階的に設定することで、Tの成長を効果的に支援している。

3.3.3 部活動通信の多面的な役割

Yの語り

Yは、部活動通信を定期的に発行し、部活動の実践状況や競技成績を掲載することで、生徒たちへの建設的な【フィードバック】と【保護者との円滑な情報交換】を実現している。また、【全人的成長】を促す内容を重点的に取り入れることにより、【生涯にわたって活躍できる人間の育成】に焦点を当てた教育を実践している。

Tの語り

「Yが出している部活通信について、いつも長い文章で、どうやってそんなに書けるのか驚いています。読んでみると、こちらまで【感謝の気持ち】でいっぱいになります。そして必ず最後には、Y先生の好きな『いつも感謝』『いつか感動』『いつも謙虚』という三つの言葉に【感銘】を受けます。その言葉を読むと、私たちも感謝の気持ちを持たないといけないと思います。また、失敗したことをどうやって改善していくか、考えさせられます。」とTは【部活通信の意義】について語っている。

Zの語り

「部活動の陸上部通信には【家族的価値】があります。子どもの写真が載っている通信は全て保管していて、一緒に見る時間を作り【親子の交流】をしています。子どもは自分の写真を見つけると『僕が載っている』と嬉し

そうに言いますが、文章を読むことは苦手なため、詳しい内容までは見ていないことが多いです。『これ、あなたの活躍のことが書いてあるんじゃない?』と促すと、『ほんとうだ』と気づきます。このように陸上部通信は、【家族間のコミュニケーションツール】となっています。』

これらの語りから、部活動通信は、Tの陸上競技における自己改善を促すとともに、教諭の熱意のこもった言葉と「いつも感謝」「いつか感動」「いつも謙虚」という価値観の提示を通して、人間形成を支援していることが分かる。さらに、陸上競技部の活動の様子や部員の成長を写真や文章で伝え、家族のコミュニケーションツールとして重要な役割を果たしている。

3.3.4 イベントの教育的意義

Yの語り

イベントの効果について、Yは、最近の生徒たちは「遊びの機会」が減少していると【社会的課題】を感じている。そのため、レクリエーション活動を通じて仲間づくりを促進した【教育的効果】を考えている。特に夏季の活動、例えばプールでの活動などは、学年を超えた【人間関係の構築】に絶好の機会であると捉えている。

Tの語り

「イベントがないと、正直、ちょっと寂しいですね。時には遊びたいなって気持ちもあります。練習も大切だけど、クリスマス会やミニ運動会、夏のプール遊びなどの【練習以外の交流機会】があるとさらに仲良くなれると思います。」とTは、【チーム作り】にイベントは必要だと語っている。

これらの語りから、イベントは、Tの気分転換の機会だけでなく、クリスマス会やミニ運動会、プール遊びなどの練習以外の交流機会を通じて、学年を超えた人間関係の構築や仲間作りを支援する重要な機会となっていることが分かる。

3.3.5 スモールステップによる活動支援の有効性

Yの語り

Yは、スモールステップでの【段階的学習の重要性】を強調している。具体的な例として、算数の九九ができていない状態で高度な数学を学習することの困難さを挙げている。そのため、【スモールステップによる成功体験の蓄積】を重視し、【一つ一つの目標達成】を確実に認識することで、生徒の成長の証として積み重ねていきたいと考えている。

Tの語り

「『この距離をやりなさい』って決めつけるんじゃなくて【柔軟な指導のアプローチ】で、【自己決定】できるように言ってくれたんです。そこまで考えてくれる先生で、そのおかげで取り組みやすかったです。」とTはハードルの距離選択における【指導者の配慮】について語っている。

Zの語り

「家では子どもに『できない』ということ強く意識させてしまっているかもしれません。そこで、できるこ

とを増やしていく【自己効力感の育成】をしています。例えば、お手伝いを1回30円の歩合制にしたところ、子どもは積極的に取り組むようになりました。【スモールステップによる目標設定】はまだ十分にできていませんが、【効果的な支援方法の模索】をしています。』

これらの語りから、Yのスモールステップでの技術指導は、Tの成功体験の蓄積を重視し、一つ一つの目標達成を確実に認識させることで、Tの自己効力感を高めながら、主体的な取り組みを促していることが分かる。

3.3.6 コントロールテストの効果

Yの語り

Yは、蓄積された実績データに基づくコントロールテストを活用して【選手の現状把握】を行い、【評価基準の明確化】によって【指導の可視化】をしている。これにより、選手自身も自らの成長過程を客観的に理解できるようになった。

Tの語り

「12分間走のコントロールテストでは、最初は自分のペースを守り、後半で徐々にスピードを上げるという【計画の立案】をし、そして最後の追い込みで2800mの目標を達成でき、【努力の結実】に大きな【達成感】を感じています。』

これらの語りから、コントロールテストは、Tが自身の成長過程を客観的に理解し、具体的な戦略を立てて実行できるようになるという点で、重要な意義を持っていることが分かる。

3.3.7 シンクロコーチングの実践と効果

Yの語り

Yは、中学生に完全な自主性を求めるのは現実的ではないと考え、生徒の【発達段階に応じた指導】が必要であるとの認識のもと、生徒たちに頻繁に声掛けを行う。このYの指導は、【基礎的な知識・技術】の習得から始まり、徐々に自主性を育成していく【長期的視点の指導】に基づいている。

Tの語り

「練習の際のYのコーチングについては、まず嬉しいと感じます。嬉しいというだけでなく、もっと頑張らないといけないなという【モチベーションの向上】につながります。アドバイスはとても分かりやすく、『じゃあ、どうしたらいいか』というように、【具体的な改善方法の提示】をしてくれます。」とTは【シンクロコーチングの効果】について語っている。

これらの語りから、具体的な改善方法の提示と心理的サポートを組み合わせたシンクロコーチングが、Tの技術向上とモチベーション向上の両面で有効に機能していることが示唆される。

3.3.8 規律ある環境づくりの意義

Yの語り

Yは、競技や発言力が低い部員だけが、雑務を一手に担う状況は好ましくないと考えている。チームに、【規律の確立】をすることにより、全ての部員が【平等な責任分担】を分かち合い、【互いに尊重し合える環境】を

整えている。

Tの語り

「挨拶はあたりまえのことなので、きちんとしていないとだめなんです。片付けは、みんなで同時に、テキパキ動かないと。準備ができてないと、【練習時間の確保】ができません。でも今は、これが【当たり前の行動として定着】しています。」と【Tは礼儀作法や基本的な行動】の重要性について語っている。

Zの語り

「部活の参観で、3年生を中心とした生徒たちの自主的な活動に感心しました。息子もその中でしっかりと役割を果たしており、これも【日頃からの良い指導】と【基礎づくり】の成果なのだ実感しました。このような【規律ある環境】があつてこそ、みんなが目的を持って活動に取り組んでいるのだと思います。」

これらの語りから、適切な規律の確立は、部活動の円滑な運営を支えるだけでなく、部員の基本的な生活習慣や規範意識の育成、チームワークと責任感の醸成、さらには自主性の発達を促進する重要な役割を果たしているといえる。

3.3.9 事前の段取りの重要性

Yの語り

Yは、【事前の段取り】を入念に行うことで部員たちを【称賛する機会】が増えると考えている。これによって、前向きな雰囲気生まれ、部員たちのやる気が高まると期待している。

長期的には、このような指導を通じて、リーダーの自主性と能力を徐々に育成し、最終的には指導者の段取りを極力抑え、【リーダーによる主体的な運営】ができるよう、サポートしていきたいと考えている。

Tの語り

「大会では、ベンチや応援席の配置など、詳しい手順の確認を行うことで、当日の【リスク管理】ができました。Yが計画を立て、【体験学習】をしてくださったことに、とても感謝しています。特に2年生は、テントの設営や片付けの練習を通じて、作業の手順を確認することができました。」と【事前準備の重要性】についてTは語っている。

Zの語り

「Yが細かく指導してくださるので、息子は【自立した活動】ができています。私は部活のことがよく分からず、プリントを見ても理解が難しいのですが、1度コール時間を間違えた以外は、息子は【安定的な参加】ができています。やはりYの【丁寧な指導】のおかげだと思います。」

これらの語りから、Yの事前の段取りには二つの重要な効果が見えてくる。一つは試合や練習における活動の円滑化とリスク管理であり、具体的な準備が実践場面の成功につながっている。もう一つは称賛機会の創出であり、適切な段取りを通じた褒める機会の増加が、部員の自信とモチベーション向上をもたらしていることが分かる。

3.3.10 保護者との連携構築

Yの語り

当初、Tの家族からの反応は極めて否定的だった。しかし、約1年間の【継続的なコミュニケーション】を経て、最初の説明時には受け入れられなかった情報も、時間をかけることで徐々に【態度の変容】が見られた。その結果、Tが家で被害を訴えてきても、母親は「おそらくあなたも何かしたのではないかと、より【中立的判断】を示すようになった。さらに、「一度、Yに確認してみたら」と提案するなど、【家庭と学校の協力関係】がみられるようになった。

Yは、【保護者関係の構築】に、生徒の努力とその成果を認識し、【具体的報告の必要性】があると考えている。例えば、Tが「腕立て」ができるようになったら保護者に連絡を入れるといった【積極的なコミュニケーション】を図っている。特にTの保護者との関係では、生徒の成長や達成の共有をすることが必要だと感じており、日々の小さな進歩も含めて、【きめ細やか観察・報告】を心がけている。

これらの語りは、保護者関係の構築においては、時間をかけた丁寧なアプローチと具体的な成果や達成の共有が重要であるとYが考えていることを示している。また、このようなきめ細やかな観察・報告が、最終的には保護者からの信頼獲得とTの教育効果を高めることにつながることを示唆している。

3.3.11 社会的スキル訓練 (SST)

Yの語り

YはTがトラブルを起こした時、その都度、【小さな社会的スキル訓練 (SST)】を実施して、【振り返り学習】として「この時どうやって言ったらよかったのか」を考えさせていた。Tが「僕には分からない」と言う時は、後輩に「僕だったらどうやって言う」と尋ねて、適切な答えを教えてもらうなどの【ピア学習】をしていた。そうやって、その都度、【対応方法の理解促進】を図り、「言い方を変えたらもっと良い状況になったのに」という【気付きの促進】を図るような指導を行っていた。

Tの語り

「2年生の8月頃までは、学年間の関係は良好でした。しかし、9月から、Tと後輩たちとの関係性が悪化し始めました。特に、後輩たちから私が【ターゲット】にされ、『偉そうだ』とか『あれをしろ、これをしろ』といった批判や要求等の【圧力を受ける】ようになりました。この状況は9月から今年の4月頃まで継続し、私にとって大きな【精神的負担】となりました。なぜ自分だけがそのような扱いを受けるのか、理解できず苦悩する日々が続きました。」

Zの語り

「子どもが横柄な態度を取ってしまう背景には、『先輩はこうあるべき』という【固定的な考え方】があります。これは私の【教育方針の影響】もあり、子どもが後輩だった時に、『先輩の言うことは必ず聞きなさい』、『敬語を使いなさい』、『先輩の指示には従いなさい』と厳しく指

導したことがありました。子どもは【規範意識の形成】により教を忠実に守っていたのですが、今度は自分が先輩になった時に、『なぜ後輩は自分がしてきたようにできないのか』という考えになってしまい、そこで人間関係がうまくいかなかったのだと思います。』

これらの語りから、Yは日常場面での即時的なSSTを通じ、Tの社会適応能力の向上を支援していることが分かる。特に、トラブル発生時に後輩の視点を取り入れた振り返りを行う手法は、多角的な学習機会を提供する効果的なアプローチとなっている。

3.4 Tの変容過程

Tの変容過程は「運動技能面での変化」、「対人関係の発達」、「自己管理能力の向上」に分類された。

3.4.1 運動技能面での変化

Tの語り

「冬期練習では、グラウンド5周などのトレーニングを通じて、自分の本当の実力が分かりました。12分間走のコントロールテストでは、最初は自分のペースを守り、後半で徐々にスピードを上げるという【計画の立案】をし、そして最後の追い込みで2800mの目標を達成でき、【努力の結実】に大きな【達成感】を感じています。」

「部活動に関連した思い出として、1年生の冬に参加したYMカップが特に印象深く残っています。初めての大会で緊張しながらも、自分のペースを守り通した結果、区間賞を獲得することができました。その瞬間の喜びは言葉では表現しきれないほどで、それまでの【努力の結実】を強く感じ、【自己効力感】を獲得しました。」

「最後の総合体育大会を迎えた当日、特に大きな緊張を感じていました。引退試合となる最後の大会でしたから、失敗は許されないという【プレッシャー】を強く感じ、身体が強張ってしまいました。そのような緊張状態でしたが、私は100メートル走で結果を残したいという強い思いを持って臨みました。その結果、1年時、17秒台だった記録が、最後の試合で【記録更新】として自己ベストとなる13秒90を記録することができ、【自己実現】を遂げました。」

この語りから、運動技能と心理面での顕著な向上が確認でき、特にコントロールテストや競技大会での成果は計画的なトレーニングの結実であることが分かる。また、これらの変容は目標達成に向けた継続的な取り組みという点で大きな進歩が認められる。

3.4.2 対人関係の発達

Tの語り

「最後の大会が終わった後、男子部員全員で集まりました。その時、3年の男子部員で肩車をして盛り上がっていました。私は、1年生の頃を振り返って、その時はあまり積極的に関わることができていなかったなど【自己反省】しました。しかし、2年生になる前から徐々に交流を持つようになり、仲良くなっていきました。そして3年生になった今では、【コミュニケーション能力が発達】し、打ち解けて会話ができるような関係になって

います。」とTは語り、【対人関係の発達】を示している。

この語りには、Tの対人関係の発達過程が示されている。1年次での消極的な関わりから、2年生になる前から徐々に交流を持つようになり、3年次では打ち解けた関係性を築くまでにコミュニケーション能力が成長し、対人関係の発達がみられる。

3.4.3 自己管理能力の向上

「Tは、1年生の時には何をすることも誰かの手助けが必要だったが、2年生になると自分でできることが増えていった。最初は、練習時間や集合時間、何をすべきかといった基本的なことまで全て、紙に書いて渡したり、先輩に付き添ってもらったり、保護者との連絡を欠かさなかったりと、周りの【支援体制】が欠かせない状態だった。しかし、時間とともにそれらが自分でできるようになり、さらには後輩に教えられるまで【自立性を獲得】できた。このように、Tの【自己管理能力の向上】は、部活動を通じた大きな成長の証と言える。」とYは述べている。

この語りから、Tは、1年時には練習時間や集合時間の把握、何をすべきかといった基本的な活動の理解と実行に課題があり、視覚的支援や先輩の付き添い、保護者との連携など、周囲からの包括的な支援を必要としていたことが分かる。しかし、2年時には自分でできることが増え、時間の経過とともに、後輩に教えることができるほど自己管理能力が向上した。

第4章 結論

4.1 研究のまとめ

4.1.1 Tの課題と支援の必要性

発達障害がある生徒が、運動部活動に参加するにあたって次の3つの課題が確認された。

1つ目は、対人関係における課題である。突発的に行動したり、不適切な態度で発言することがあるので、部員から受け入れられずチームに適応できないことがある。また、他者との適切な距離感やコミュニケーションの取り方に困難さがみられる。

2つ目は、自己管理の課題である。練習時間や集合時間の把握、何をすべきかといった基本的な活動の理解と実行に課題がある。特に、活動の見通しを立てることや準備物の管理などにおいて支援が必要である。

3つ目は、技術理解の課題である。言語的な説明だけでは十分な理解に至らず、競技技術の習得に時間を要する。特に、複雑な動作や細かい技術指導において困難さがみられる。

これらの課題をかかえるため、指導者や他の部員が特性を理解し、適切な支援やサポートを行わなければ、精神的な負担から部活動の継続が難しい状況にあることが明らかとなった。

4.1.2 Yの発達障害のある生徒の捉え方

発達障害のある生徒の運動部活動への参加について、Yは次のような捉え方をしていることが明らかになった。

第1に、発達障害のある生徒は部活動において様々な困難に直面するが、教諭が長期的な展望を持ち、継続的なサポートを行うことで、大きな成長を遂げることができると捉えている。これは、適切な支援があれば、部活動が発達障害のある生徒の成長の機会となり得ることを示している。

第2に、Tと他の部員が共に活動することで、双方に成長の機会が生まれると認識している。特に他の部員については、Tへの寄り添いや気遣いの言葉かけ、困った際の自発的な支援など、配慮する態度が育まれることを実感している。

このような指導者の捉え方は、インクルーシブな部活動環境づくりにおいて、発達障害のある生徒への支援が、個人の成長だけでなく、集団全体の成長にもつながることを示唆している

4.1.3 効果的な支援実践の確立

Yの部活動指導実践は、発達障害のある生徒が充実した活動を行うために効果的な支援となっていることが明らかになった。

第1に、視覚支援と個別ノートの活用による理解促進である。Yは、視覚情報を活用した支援を、技術指導(動画・プリント)、動機づけ(記録・目標の掲示)、自主運営(スケジュール掲示)、環境設定(色分けコーン)など、多面的に展開していた。このような視覚的支援は、Tの認知特性に適合し、技術向上や活動への動機づけを促進するものであった。また、個人ノートは単なる記録ではなく、Tの思考を深め、目標達成への具体的な道筋を示すツールとして機能していた。Yは、Tの現状を的確に把握し、達成可能な目標を段階的に設定することで、効果的な成長支援を実現していた。

第2に、スモールステップ指導とシンクロコーチングによる技術習得支援である。Yのスモールステップでの技術指導は、Tの成功体験の蓄積を重視し、一つ一つの目標達成を確実に認識させることで、Tの主體的な取り組みを促していることが分かる。さらに、具体的な改善方法の提示と心理的サポートを組み合わせたシンクロコーチングが、Tの技術向上とモチベーション向上の両面で有効に機能している。

第3に規律ある環境と事前準備の効果である。Yは、チームに規律の確立を行うことで、部活動の円滑な運営を支えるだけでなく、部員の基本的な生活習慣や規範意識の育成、チームワークと責任感の育成、さらには自主性の発達を促進している。また、Yの事前準備には二つの重要な効果があり、一つは試合や練習における活動の円滑化と混乱防止であり、具体的な準備が実践場面での成功につながっている。もう一つは称賛機会の創出であり、適切な事前準備を通じた褒める機会の増加が、部員の自信とモチベーション向上をもたらしている。この規律ある環境とYの事前準備があるからこそ、Tは安心して毎日の練習や試合を行うことができている。

第4に、SST活用と保護者連携による社会性の育成である。Yは日常場面での即時的なSSTを通じ、Tの社

会適応能力の向上を支援している。特に、トラブル発生時に後輩の視点を取り入れた振り返りを行う手法は、多角的な学習機会を提供する効果的なアプローチといえる。また、Yは保護者関係の構築において、時間をかけた丁寧な対話と具体的な成果の共有が重要であることを示している。このようなきめ細やかな報告と連携が、保護者からの信頼獲得につながり、結果としてTの成長を支える効果的な支援体制の確立を可能にしている。

これらの他にも、コントロールテスト、イベントの実施など、様々な支援方法の有効性が確認された。

4.2 研究の意義

4.2.1 部活動における発達障害のある生徒への個別支援方法

発達障害のある生徒の自己管理や技術理解の課題に対して、視覚支援や個別ノートの活用、スモールステップ指導など、実践的で効果的な支援の方法を示すことができた。これらの支援方法は、発達障害のある生徒の特性を踏まえた実践例として、他の運動部活動においても活用できる知見を提供している。視覚支援については、例えばチーム競技(サッカー、バスケットボール)では、ホワイトボードや動画を用いて動き方を示したり、コートやグラウンドにマーカーやコーンを配置して位置取りや移動順序を視覚的に理解させたりすることができる。また、個人競技(水泳、体操等)では、正しいフォームを写真や動画で示し、技術のポイントを視覚的に理解させることができる。

個別ノートを通じたコミュニケーションについては、チーム競技では、試合での反省点や次の目標を具体的に記述することで、課題の明確化につながる。個人競技では、練習内容や自己記録を記入することで、成長の過程を可視化することができる。

スモールステップによる指導については、チーム競技では、基本技術を段階的に習得させることができる。例えば、パスやシュートなどの基本動作から、徐々に複雑な戦術理解へと発展させることができる。個人競技では、技術を細かく分けて一つずつ確実に習得していく指導が可能であり、記録向上についても、小さな目標を設定して段階的な達成を目指すことができる。

4.2.2 インクルーシブな部活動環境の実現

発達障害のある生徒と他の部員が共に活動し成長できる環境づくりのために、対人関係の課題に対するSST活用や規律ある環境の整備、事前準備の重視など、具体的な実践方法を示すことができた。また、保護者との連携構築を含めた支援により、チームの雰囲気良くなり、生徒全員の活動意欲や技術が高まることが明らかになった。

このインクルーシブな環境は、発達障害のある生徒にとっては、規律や事前準備による見通しの確保、SSTを通じた社会的スキルの獲得など、安心して活動できる場を提供し、運動技能の向上だけでなく、社会性の発達も促進することができる。一方、定型発達の生徒にとっ

では、発達障害のある生徒との関わりを通じて、他者への配慮や思いやりの心が生まれ、多様性を受け入れる力や社会性が高まるとともに、自らの新たな一面を発見する機会となることが示された。さらに、このような相互理解と成長の過程は、部活動全体の人格形成の場としての教育的意義を高めることが明らかになった。

4.2.3 指導者に求められる支援の在り方

生徒の小さな変化や成長を長期的な視点で捉え、適切な励ましや評価を行うこと、また部活動という集団での活動を通じて、発達障害のある生徒と他の部員が互いに学び合い、成長できる機会を意図的に設定することの重要性が明らかになった。これらの支援の在り方は、今後の運動部活動をよりよく導いていく手がかりとなる。

4.3 今後の課題と展望

4.3.1 支援方法の一般化と他の運動部活動への応用

本研究で示した、発達障害のある生徒の対人関係、自己管理、技術理解等の課題に応じた視覚支援、個別ノート、スモールステップ指導等の具体的支援方法は、実践例として他の運動部活動においても応用可能である。ただし、競技特性や活動形態の違いに応じた調整が必要となる。

4.3.2 インクルーシブな部活動のさらなる発展

第1に、指導体制の整備がある。現状では主顧問一人での指導が中心となっており、副顧問は補助的な役割に留まっている。発達障害のある生徒には個別対応が必要であることから、常時複数の顧問による指導体制の確立が求められる。また、特別支援教育コーディネーターや養護教諭との連携体制を構築し、専門的な知見を活かした指導体制の充実も重要である。

第2に、部活動の位置づけに関する課題がある。中学校部活動は教育課程外に位置づけられているため、会議や生徒指導等の学校業務が優先され、顧問が部活動に十分な時間を割けない現状がある。このため、発達障害のある生徒への必要な支援や配慮が十分に行えない状況が生じている。部活動の教育的意義を踏まえた制度的位置づけの見直しや、支援体制の整備が必要である。

第3に、部活動の運営方針の課題がある。顧問が勝利至上主義に偏重した運営を行うと、発達障害のある生徒の参加が困難になる。発達障害のある生徒と他の部員が互いを理解し、共に活動を楽しみながら成長できる視点に立った運営が必要である。そのためには、生徒一人一人の特性や目標に応じた活動内容の工夫や、活動時間や役割を柔軟に設定できる参加形態の保障が重要となる。

第4に、研修機会の充実と実践的な指導力の向上が必要である。現在の発達障害に関する研修は、一般的な知識の習得に留まっており、部活動運営に特化した内容が不足している。そのため、顧問は手探りで運営を強いられ、様々なトラブルが発生している。より実践的な研修プログラムの開発と実施が求められる。特に、発達障害の特性に応じた指導方法や、具体的な配慮事例の共有、保護者との連携方法など、実務に直結する内容を重

点的に扱う必要がある。

これらの課題に取り組むことで、すべての生徒が参加しやすい、インクルーシブな部活動の実現が期待される。そのためには、学校全体での理解促進と支援体制の構築、さらには教育行政による制度面でのバックアップが不可欠である。

4.4 本研究の限界

第1に、事例研究としての限界である。本研究は、特定の事例Tに焦点を当てた事例研究であり、得られた知見の一般化には慎重な検討が必要である。発達障害の特性は個人差が大きく、本研究で対象としたTの事例が、すべての発達障害のある生徒の特徴を代表しているわけではない。

第2に、データ収集上の限界である。インタビュー調査が主なデータ収集方法であり、Yの主観的な評価や解釈が中心となっている。また、生徒本人からの直接的なデータ収集が限られている。さらに、観察期間や観察回数に制約がある。

第3に、特定の運動部活動（種目）のみを対象としていること、学校の規模や地域性による影響を考慮できていないこと、他の指導者や支援者の視点が含まれていないことによる限界である。

引用文献

- 文部科学省 (2013) 「運動部活動での指導のガイドライン」
https://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop04/list/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/06/12/1372445_1.pdf (2024年11月17日閲覧)
- 文部科学省 (2018) 「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」
https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kondankaito/bunkakatsudo_guideline/01/pdf/r1407482_05.pdf (2024年11月17日閲覧)
- 大谷尚 (2007) 「4ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案—着しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き—」名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 (教育科学) 54 (2), 27-44.
- 山下播介・田部絢子・石川衣紀・上好功・至田精一・高橋智 (2010) 「発達障害の本人調査からみた発達障害者が有するスポーツの困難・ニーズ」東京学芸大学紀要総合教育科学系, 61 (1), 319-357.
- 吉岡尚美・重藤誠市郎・内田匡輔 (2023) 「発達障害児・者のスポーツ参加における障壁に関する文献レビュー」東海大学紀要体育学部, 52, 31-38.

